

# 熱を持って接すれば、熱を持って返ってくる

SRSボクシングジム株式会社 会長  
さかもと ひろ ゆき  
**坂本 博之**さん

福岡県出身。1991年、プロボクサーとしてデビューし19連勝を挙げた。第44代日本ライト級チャンピオン、第34代東洋太平洋ライト級チャンピオン。全国の児童養護施設の子どもを支援する「こころの青空基金」代表。



交流した子どもたちからのお礼の言葉が、ジムにはたくさん飾られています。

プロボクサー現役時代から、児童養護施設の子どもたちの支援活動を続けている坂本さん。ご自身も幼少期に虐待を受け、児童養護施設で過ごされました。常に当事者の立場に立って、心に傷を負った子どもたちと向き合う坂本さんに子どもたちに伝えたい思いや、大人の果たすべき役割について伺いました。

坂本さんは、児童養護施設の子どもたちを支援する活動をされていますが、ご自身も幼少期に児童養護施設に入所されていたそうですね。

物心つく前に両親が離婚し、僕と弟は母方に引き取られたのですが、5歳になるまで乳児院、児童養護施設で過ごしました。その後、母と暮らし始めたのですが、それも束の間。小学2年生の時に、僕と弟は母の知人宅に預けられたのです。

その家で「何で大人はこげなことをするんやろか？」と思う扱いを受けました。ほとんど食事を与えられず、一日の食事は給食だけ。給食のない日は近くの川で釣りをしている人に魚を分けてもらったり、ザリガニを捕まえて食べたりしました。暴力も振るわれ、大人への不信感を募らせていく日々でした。そのうち弟が栄養失調で倒れ、僕は拒食症になってしまったのです。

学校が異変に気付いて児童相談所に通報し、博多市内の児童養護施設・和白青松園に入所すること

だから僕は子どもたちに言います。「お金がないからと夢を諦めてはいけません。できないことを境遇のせいにしてはいけません。ないなりに行動を起こせ。僕はそうやって少しずつ近づきながら、夢をつかんだんだよ。」

1991年のデビュー戦から19連勝を挙げ、日本チャンピオン、東洋太平洋チャンピオンを次々と獲得。世界タイトルマッチに挑戦するなど華やかな選手生活を送るなかで、児童養護施設の子どもたちと交流を始めたきっかけを伺えますか。

デビューして2年目に全日本新入王に選ばれた時、「僕の命をつなぎ止めてくれた和白青松園はまだあるのかな？」とふと気になって、博多まで足を伸ばしてみると、前と同じようにたくさんの子どもたちが暮らしていました。その10カ月後、日本チャンピオンになった時も訪れて、子どもたちに報告し「次は世界チャンピオンになるけん、応援してな」と伝えると、「兄ちゃん、すごか！みんなで応援するよ」と、目を輝かせてくれました。そこから子どもたちとの文通が始まりました。

2000年に「こころの青空基金」を設立しました。これは「全夢を見つけて」「一生懸命」に頑張り続けると、途中で疲れてしまおうでしょう。だから一瞬、一瞬で頑張らばいい。人生は一瞬、一瞬の積み重ねだから、「一生懸命」を続けていけば、きっと夢は叶います。夢を持ったなら、とにかく行動を起こすこと。頑張っている人を見ると、周囲の人は応援してくれるし、応援されることによって、人はもっともっと前向きになって頑張ることができるようになります。

僕がプロボクシングのデビュー戦で勝った時、観客の皆さんは拍手をしながら祝福してくれました。「人に認められるって、こんなに気持ちのいいものなのか。だったらもっと大きな舞台で、大観衆の拍手を浴びたい」という気持ちが高まり、練習にも熱が入って、その後の連勝につながりました。

2010年に「SRSボクシングジム」を設立し、児童養護施設の子どもや卒園生も受け入れ、ボクシング指導だけでなく就労支援などもされていると伺いました。

少年院を出た子も含めて、さまざまな境遇の練習生を受け入れています。一人一人の気持ちに寄り添うことは簡単ではありませんが、僕は「情動調律」を行って、

になりました。一日3食、安心して食事がとれるようになり、同じような境遇の仲間とおしゃべりするなかで、僕はようやく笑うことができるようになりました。

ボクシングと出会い、プロボクサーになるまでの道のりについて教えてください。

ある日、児童養護施設の食堂のテレビでボクシング中継を目にしました。スポットライトを浴びて花道を歩いている選手のまぶしい姿に魅了され、「僕もプロボクサーになって、ブラウン管の向こうの世界に行きたい」と強く思ったの

の子ども達は平等に」という理念に基づいて、児童養護施設の子どもたちが、将来への道を切り開くきっかけづくりの支援を行う基金です。その年の世界タイトルマッチの記者会見の場で寄付を呼び掛け、最初に和白青松園にパソコンを贈りました。子どもたちがやりたいことを見つけたら、夢に出会うことに役立ててほしいと考えたのです。

その後、全国の児童養護施設を訪問して子どもたちとの交流を展開するなど、活動を広げていかれたのですか。

私は4度世界タイトルマッチに挑戦して、あと一歩手が届かず、2007年に引退しました。15年間のボクシング生活で学んだことは「熱を持って接すれば、熱を持って返ってくる」ということです。そこで私は全国の児童養護施設を訪問して、子どもたちと直接ふれあい、私が経験したことを伝えて「熱」に変えていってほしいと考えました。

この支援活動を「Sky High Rings」(SRS)と名付けました。ボクシングジムの名前もSRSです。この言葉には、痛みを抱えた子どもたちの心を天高く持ち上げて、人と人がつながって輪になっ

理解をするように努めています。これは頭で相手を理解しようとするのではなく、相手の行動や状況から推察して、自分の感情を相手に合わせるようにする方法です。すると相手の気持ちが理解できるようになり、心のキャッチボールができるようになります。

地域にも、心に傷を負った多くの子どもたちがいます。身近にいる大人はどのように向き合ったら支えていけばいいのでしょうか。

根気よく、その子と向き合っていくことです。すぐには受け入れられないと思いますし、子どもの頑なな気持ちも簡単には変わりません。でも諦めないで関わり続ける。「待つ愛情です。すると、その子がなぜ頑ななのか、なぜ悪いことを繰り返すのか見えてくる瞬間がある。愛情が子どもに伝わって気持ちを通うようになり「こうしてあげればいい」という方向性も見えてきます。長い時間がかかりますが、「熱を持って接すれば、熱を持って返ってくる」です。このように「根気」と「待つ愛情」を持って、子どもを支援することが、大人の役割だと僕は思います。



交流した子どもたちの手作りトロフィーを持ってガッツポーズする坂本博之さん。

て生きていこうという思いを込めました。子どもたちはとかく「わが道を行く」と一人で突っ走ってしまうのですが、必ず行き止まりがあつて、そのときには周囲に助けられる人がいないし、輪の中で支えあうことができる。そんなことを子どもたちに伝えたいのです。

全国の児童養護施設で行っているボクシングセッションについて教えてください。

ボクシングセッションは、厳しい現実を抱えている子どもたちと直接交流して気持ちを受け止める取り組みです。まず、子どもたちに「これまで生きてきたなかで、一番うれしかったことを考えてごらん」と声を掛け、次に「悲しかったこと」「怒りを覚えたこと」を思い浮かべてもらいます。そして、その喜びや悲しみ、怒りの気持ちを込めて、私が構えたミットに向かって力いっぱい打ち込むのです。

つらかったことを思い出して、目に涙を浮かべながら打ってくる子もいますし、歯を食いしばって怒りをぶつけてくる子もいます。子どもたちを傷つけたのは大人かもしれないけど、その傷ついた気持ちを受け止める大人がいることを伝えたい。児童養護施設に入所

具販売・販売用  
シルバーホクソン  
Hoxon Silver  
〒332-0032 川口市中青木2-22-34  
フリーダイヤル 0120-65-4649  
介護保険指定事業者番号1170200222

福祉用具貸与・販売 / 住宅改修  
訪問介護サービス  
福祉のニッカ  
0120-002940